

中学校 英語

書くことの自己表現活動において、音読と書くことを関連させた
指導の工夫

一文構造を身に付ける音読指導の在り方ー

七戸町立七戸中学校 教諭 平 館 奈々子

要 旨

本研究は、書く力を付ける手段として、音読と書くことの関連付けが有効であることを明らかにしたものである。文構造を身に付けさせる音読と、音声と文字の結び付きを強化する活動を行った結果、書くことへの抵抗感が少なくなった。また、教科書本文の表現を用いながら自分のことについて書くようになり、文数の増加や接続詞、副詞句を用いて文を書き進めるようになるなどの変化が見られた。

キーワード：中学校 英語 音読 自己表現活動 書くこと

I 主題設定の理由

書くことによって自己表現することは、中学校3年間の英語学習における大きな目標である。青森県立高等学校入学者選抜学力検査には、ここ数年間、自分の考えやそれについての理由を含めて、まとまった英語の文章を書く問題が出題されている。このことから、中学校3年間で、自分の考えをまとまった文章で書く力が求められていることが分かる。英語で自分のことについて話したり書いたりすることは、自分の考えを理解してもらえるとという大きな喜びにつながるのではないかと考える。

しかし、本校で年に2回、全教科で実施している生徒の自己評価による「学習がんばりアンケート」の結果から、本校生徒の実態として、英語で自分の考えや意見を書いたり話したりすることに苦手意識をもっている生徒が多いことが伺える。意欲面だけではなく、校内での定期テストにおいて、自分の考えを英語で書く問題でも、文法的に正しい英文を書くことができなかつたり、英文を書こうとしなかつたりする生徒が多く見受けられる。しかし、本校の生徒は、聞いたり話したりすることには楽しみながら取り組む姿が多く見られる。

この点に着目し、英語を音声で表現する活動と文字で表現する活動を関連付けることで、書くことへの意欲も高まり、書く力を付けることができるのではないかと考えた。英語を音声で表現する活動の中でも、音読はどの生徒でも取り組みやすく学級全体でできる活動であるため、音読指導をメインに位置付けた。音読を通して身に付けた表現を英作文に応用するというプロセスが定着すれば、書くことへの抵抗感も少なくなり、自己表現活動に取り組みやすくなるのではないかと考えた。

II 研究のねらい

音読活動を通して文構造を身に付けさせることを通して、自分のことについて英語で書くことができるようになることを実践により明らかにする。

III 研究仮説

音読から書くことへと移行する活動を行ってから、書くことの自己表現活動につなげていけば、書く力が高まっていくであろう。

IV 研究の実際とその考察

1 研究における基本的な考え方

(1) 書くことについて

中学校学習指導要領（平成20年3月告示）第2章「第9節 外国語」の「第2 各言語の目標及び内容等」の「英語 I 目標」では、「書くこと」の目標について「(4) 英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする」と示されている。自らの体験や考えなどを結び付けながら英文を書くことによって、情報を発信したりコミュニケーションを図ったりすることが求められている。しかし、生徒にとって、自分の考えを日本語で簡潔にまとめ、さらに英語に変換することは非常に困難であることが予想される。また、自分の考えを相手に正確に伝えられる英文を書く自信がなければ、英語で自分の考えを書こうとする意欲は後退していくのではないだろうか。

そこで、音読によって自己表現する際のモデルとなる文や表現を身に付け、それらを使って、自己表現活動の指導を行っていけば、書くことへの抵抗が少なくなるのではないかと考えた。生徒にとって、教科書にある英文は使われる場面や状況がはっきりしており、一番身近なモデル文でもある。そのため、教科書の英文を音読することが、実際のコミュニケーションに結び付きやすいと考えた。

自分のことを書くときに、教科書から同様の場面を思い出し、その中で使われていた表現を応用できるようにするには反復練習が不可欠である。音読は、全体、ペア、個人というような形態の工夫、CDの使用や音読スピードの調整など、変化を付けることが可能な活動であるため、何度も声に出して練習するのに適していて、様々な表現を定着させる反復練習には有効である。

音読指導では、スラッシュリーディングを取り入れた。まず、区切って音読することで、英文を読むことを苦手とする生徒にも、取り組みやすい活動となると考えたからである。また、音読について、土屋澄男は、「音読は、チャンクをなすそれぞれの語句の機能や内部構造についての知識を確実にし、反復練習することによって、それらが必要なときにいつでも自動的に口をついて出てくるような状態で脳の中に蓄積するのを助ける」（土屋澄男，2004）と示している。長い文であっても、区切って音読したり、チャンクを組み合わせたりして、文の仕組みを理解するようになれば、文を作るときにもチャンクを組み合わせていくという発想で、書いていくことができるのではないかと考えた。

(2) 書くことの前段階としての音読指導

教科書本文の音読練習後、図1に示している本文の穴埋めプリントを見ながら音読し、その後空欄に英語を書いて文を完成させる活動を行った。この活動の中で生徒は、まず音声で空欄を補いながら英文を完成させ、その後、自分で発した音声を文字に換えることになる。このようにして文字と音声の間を行き来することによって、結び付きを強化できるのではないかと考えた。

井上志帆は「単語はただ単独で覚えるよりも、英文の中で「意味があるもの」として覚える方がより効果的に覚えられるのではないかと」（井上志帆，2009）と述べている。この考え方にに基づき、穴埋めプリントでは、教科書本文の新出語句や重要表現の部分を空欄にし、記憶にとどめさせたいと考えた。

穴埋めプリントには二つの難易度のものを載せることとした。生徒は、1回目は日本語の意味が付けてあるAパターンを、2回目は英文のみで空欄の数も多いBパターンを音読する。その後どちらか一方を選び、英語を書いて穴埋めをするようにした。このことで、声に出して読めない英文は、英語で書けないということを生徒に意識させることができると考えた。また、何のために音読をするのか、という音読の意義を考えさせる上でも、書く活動へ橋渡しするステップは重要である。そのために、音読はそれ自体が目的ではなく、自己表現できるようになるための前段階であるということを伝えたい。音読を通して表現が実際どのような状況で使用されるのかを理解し、それから自己表現活動で使ってみる、という流れにすることとし

A

① あなたは何をしますか 放課後
What do you do _____ ?

② 多くの生徒は スポーツをします。
Many students _____ .

③ 私は 一員です ラクロスチームの
I'm _____ the lacrosse _____ .

④ これは 私の ラクロススティックです
This is _____ lacrosse stick.

⑤ あのネットは何ですか 向こうにある
What's that net _____ ?

⑥ それは ドリームキャッチャーです
It's a _____ catcher.

B

① What do you _____ ?

② Many students _____ .

③ I'm _____ the lacrosse _____ .

④ This is _____ lacrosse stick.

⑤ What's that net _____ ?

⑥ It's a _____ catcher.

図1 穴埋めプリント

そのために、音読はそれ自体が目的ではなく、自己表現できるようになるための前段階であるということを伝えたい。音読を通して表現が実際どのような状況で使用されるのかを理解し、それから自己表現活動で使ってみる、という流れにすることとし

た。

英作文については、単元が終わるごとに行うこととした。これは、その単元で学習した文法事項や表現を、学習後すぐに自己表現することで定着が図られる。また、教科書本文の音読と書くことを切り離した活動として位置付けるのではなく、内容を理解した英文を音読し、徐々に書いてアウトプットしていくという段階を踏ませ、最終的に自己表現へとつなげられると考えたためである。限られた授業時間の中で、いかに音読した英文を自己表現につなげるかが重要である。まず、スラッシュリーディングなどの反復練習によって自己表現に使える表現として蓄積させる。それから音読した英文を応用して自分のことについて書かせるという段階を踏ませた。

(3) My Essayについて

表1に示しているように、単元ごとにその単元の題材に合わせたテーマを与え、自分のことについて書く活動を取り入れた。教科書の表現を自分に結び付けて使うことで、理解が深まると考えたためである。この活動では、教科書の既習表現を積極的に使わせ自分のことを英語でより多く表現させながら、音読で得た表現をベースにして、書くことの意欲や見通しをもたせることと、書いてみたいと思わせるようなテーマ設定をすることが必要となってくる。

表1 My Essayのテーマ

単元名	題材	文法事項	My Essayのテーマ
Unit 5 ピクニックに行こう	ハンバーガー店での注文、持ち物の数を問う対話	名詞の複数形 How many	わたしの持ち物自慢
Unit 6 グリーン家の人々	家族の紹介	三人称単数現在形	わたしの身の回りの人物紹介
Unit 7 カナダの学校	カナダの中学校紹介	Who 時刻を尋ねる表現	わたしの部活動

そこで、My Essayでは、教科書で扱われた題材と関連があり、学習した文法事項を用いることが求められるようなテーマ設定とした。また、英作文のモデルとなる文を教科書本文から抽出し、それらを応用することを第一段階に位置付けた。さらに、既習事項を用いて英文を作る全体での練習や例文の提示をし、書く内容の見通しをもたせてから、個人で書く活動を行った。自分以外の人物について書くテーマの時には、「取材タイム」として、周りの生徒から情報を集める時間を設けた。書く内容を決められない生徒には「ヒントカード」を一枚選ばせ、題目やそれに関する情報を与えることとした。なお、My Essayでは、文法的な誤りを含む文でも意味が通じるものであれば一文とみなした。これは生徒が間違えることを避けて平易な文のみを書くことを防ぐためである。

そこで、My Essayでは、教科書で扱われた題材と関連があり、学習した文法事項を用いることが求められるようなテーマ設定とした。また、英作文のモデルとなる文を教科書本文から抽出し、それらを応用することを第一段階に位置付けた。さらに、既習事項を用いて英文を作る全体での練習や例文の提示をし、書く内容の見通しをもたせてから、個人で書く活動を行った。自分以外の人物について書くテーマの時には、「取材タイム」として、周りの生徒から情報を集める時間を設けた。書く内容を決められない生徒には「ヒントカード」を一枚選ばせ、題目やそれに関する情報を与えることとした。なお、My Essayでは、文法的な誤りを含む文でも意味が通じるものであれば一文とみなした。これは生徒が間違えることを避けて平易な文のみを書くことを防ぐためである。

2 検証の実際

(1) 検証授業前の生徒の実態

図2は1年2組30名の生徒を対象に、9月に行った「音読と書くことの意識調査」の結果を示したグラフである。「音読は好きですか」の問いに対して、「そう思う、どちらかといえばそう思う」と答えた生徒は合わせて19人であったのに対し、「英語で自分や身の回りのことについて書くのは好きですか」の問いに「そう思う、どちらかといえばそう思う」と答えた生徒は合わせて12人とどまった。その理由として、「使う単語は知っているもつづりがわからない」と答えた生徒は23人、「書きたいことを英文に直すとき単語をどういう順番にしたらいいかわからない」と答えた生徒は15人、「どんなことを書いたらいいか思いつかない」と答えた生徒は10人であった。

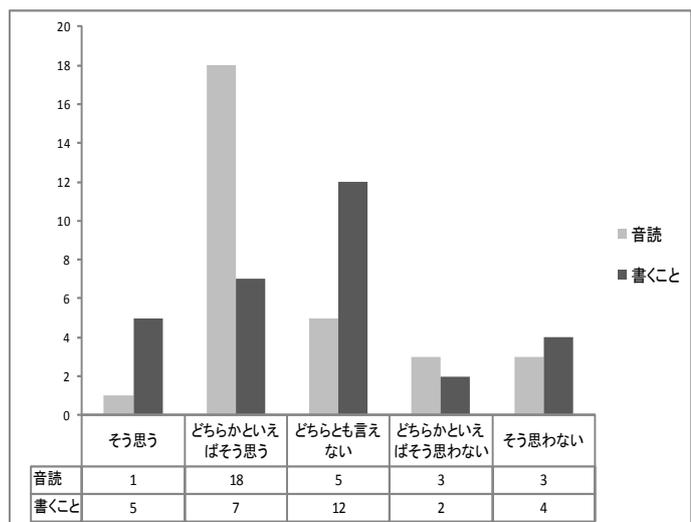


図2 音読と書くことの意識調査（事前）

そこで、先述したような構想をもちながら穴埋めプリントを作成し、新出語句や重要な文法事項のスペ

リングを書いて覚えるように指導した。

また、語順についての練習を補充・強化するために、二つのレベルの問題からなるワークシートを構成した。これは、「書きたいことを英文に直すとき単語をどういう順番にしたらいいかわからない」という生徒に対応するためのものである。始めにモデル文の空欄に単語を書き入れて完成させ、その後自分で英文を作るといように段階を踏んでいけば、語順がわからないために英文を書けない生徒も取り組みやすくなると考えた。

さらに、テーマに適する英文が思いつかないという生徒への支援として、ワークシートに「ヒント」として例文を載せたり、‘hard’や‘well’などの副詞を文でどのように使うかを指導したりすることとした。

(2) 検証授業について

カナダの中学生在が放課後、どのように過ごしているかについて対話している教材文の内容理解をさせた後に音読練習を行った。音読練習は、教師によるモデルリーディングとスラッシュを入れる場所の指示の後、全体でのスラッシュリーディング、一文ずつのリピーティング、ペアでのロールプレイ、教師と生徒でのRead and Look-upしながらのロールプレイという順に行い、その後、図1に示した穴埋めプリントを使っての音読を行った。生徒はプリントのレベルA、レベルBをバズリーディングした後、一方のレベルを選び空欄へ単語を書いて行う活動をした。

次に、部活動をテーマにして、自分についての英文をワークシートに5文以上書くという目標を提示した。自己表現に入る前には、教科書本文で使われていた、‘I’m a member of the () team. This is my ().’の表現を使う練習として部活動の顧問がスポーツをしている写真を見せ、全体での口頭練習を行った。

また、既習事項の応用例として、以前に学習した、‘hard’と‘well’のフラッシュカードを見せ、それらを使って英文を付け加えさせた。この時間は多少のミスは気にせず、できるだけ多く書くように助言し、つづりのわからない語はローマ字で書いておくこととし、次の時間に辞書を用いて正確に書いていくこととした。また、よい表現を書いた生徒には書いている途中で発表させて、学級全体でその表現を共有した。

(3) 検証授業を終えて

テーマ英作文を行うのは以前から行っていたことと、また、必ず使う表現やヒントも示されていたこともあり、生徒はあまり抵抗を感じずに活動を行うことができた。ただ、‘This is my ().’を使ってスポーツに使う道具を紹介する文では、何を取り上げたらよいかや英語でどう表現するかについてつまづく生徒が見られた。どんな基本表現を応用して文を作るのかと並行して、語彙を増やしたり、自分が知っている単語を用いて説明する練習を行ったりすることも必要であると感じた。既習事項を用いて自由な英文を書く段階では、前のパートで学習した、‘from Monday to Friday’という表現を使って‘I play basketball from Tuesday to Saturday.’(生徒原文)や、‘I play basketball from four thirty to seven.’(生徒原文)という文を書いた生徒がいたため、既習事項を用いた表現として、その場で紹介した。すると、多くの生徒がこれをまねた文を書き足している様子が見られた。

このようにして、既習事項を積極的に活用するよう全体に助言し、まだ習っていない表現については、生徒からの質問に応じてその都度表現を教えた。これは辞書にある未習の複雑な表現を用いるよりも、自分の知っている表現を使って、英文を書く態度を養いたいと考えたからである。

この検証授業の前に音読したパートで使われていた表現を応用し‘Soccer is interesting. So I like soccer.’(生徒原文)というように、接続詞の‘so’を使って理由を付け加えるようになった生徒もいた。教科書本文中では、‘We only have five minutes between classes. So we move quickly.’という文で‘so’が使われており、これを応用して書いたものと思われる。

また、前の単元で教科書本文に出てきた‘It’s not easy, but I study hard.’を応用して、

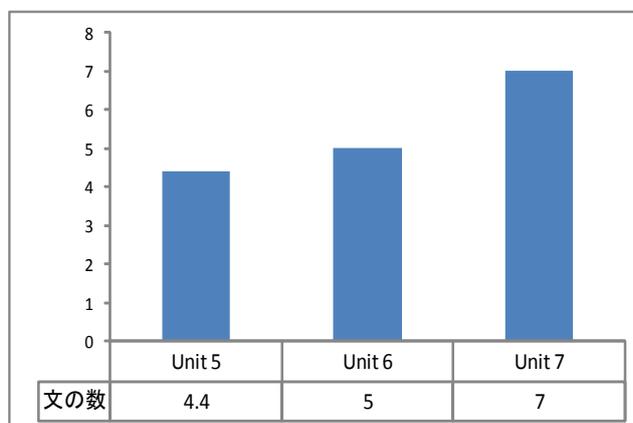


図3 単元別My Essayの一人当たりの文の数

‘It’s not easy. But I play very hard.’ (生徒原文) と表現している生徒もいた。これらの表現は、音読を通して繰り返し声に出したり、穴埋めプリントを用いて文字に表したりしながら覚えたものだからこそ、書くことの自己表現に応用できたのではないかと考えられる。単語としてではなく、使用場面や語順も含めて使いこなせるような音読を行った結果、表現の定着が図られたのではないだろうか。検証授業では、すべての生徒がこの時間の目標であった5文以上を書いて自己表現することができた。

また、図3は、各単元で生徒が書いたMy Essayの、一人当たりの文の数をグラフ化したものである。単元が進むにつれて徐々に文数が増加していったことが分かる。同時に一文当たりの語数も増加し、副詞や接続詞を使って英文を書けるようになってきた。生徒Aは、図4と図5を比較して分かるように、肯定文の後に接続詞の‘but’ を使って否定文を続けられるように変容した。なお、生徒Aの文にある ‘be good at …’ や ‘like to + 動詞の原形’ の表現は、1年生の教科書では扱われていない表現であるため、教師が指導した表現である。自分が表現したいことが増えるにつれて、多くの文法知識が必要になると生徒が実感することは、英語学習への意欲を喚起することにもつながると考える。そのためには既習表現の定着と新しい知識を応用して、表現の幅を広げていくことが重要である。

意欲の面でも表2にあるように、「書くことが好き・どちらかといえば好き」と答える生徒が増加している。これは本文の穴埋めプリントを用いながら、音読と書くことを関連付けたことによって、音と文字の結び付きが強化され、語のつづりが分からないために書くことを苦手としていた生徒の手助けとなったことが要因となっていると考えられる。また、教科書の表現をベースにして文を作ることで、書くことに対する自信が付いてきたためであろう。文を書けるようになるにつれて、自分のことを伝える楽しさも実感するようになったのではないだろうか。

また、既習事項を活用させながらまとまった英文を書く機会を増やし、自分のことについて書くという経験を積ませることも重要である。



図4 生徒Aの英作文（検証授業前）

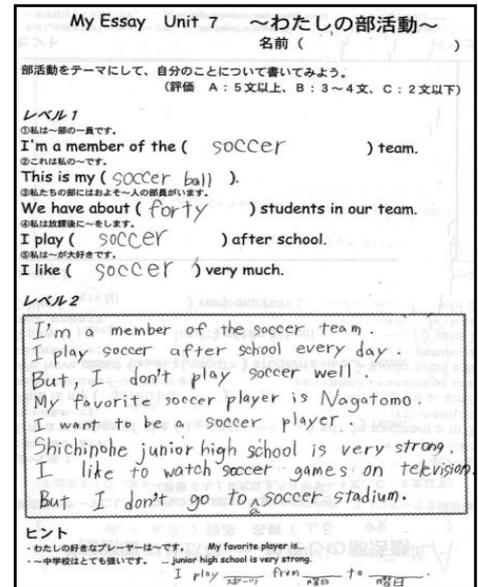


図5 生徒Aの英作文（検証授業中）

V 研究のまとめ

音読練習を書くことの前段階に位置付けて、スラッシュリーディングや穴埋めプリントを使って継続的に音読指導に取り組んできたことで、表2に示しているように、書くことを難しいことととらえていた生徒の意識が変化し、書くことを楽しむようになってきた。教科書の英文を声に出して読めるという自信が、書く活動での意欲的な取組にもつながっていったのではないだろうか。

スラッシュリーディングによって接続詞や副詞句といったチャンクを識別し、書くことの自己表現に生かす様子が見られた。モデルとなる文の構造を理解させるような音読指導が書くことへつなげるのに有効であったと考える。

VI 本研究における課題

表2 音読と書くことの事前事後の意識調査の比較

	好き・どちらかと言えば好き		嫌い・どちらかと言えば嫌い	
	授業前	授業後	授業前	授業後
音読	19人	17人	6人	5人
書くこと	12人	17人	5人	4人

事後調査の結果、「音読が好き」と答える生徒がわずかに減少した。これは、My Essayでは単語のつづりや文法的な誤りは気にせずに活動していたのに比べ、音読指導では文字を正確に音声に変換することに重点を置いていたために、生徒には音読が機械的な活動に思われたためではないだろうか。今後は、音読を単なる英文の暗記で終わらせるのではなく、より英文の内容が伝わるような話し方や単語の強弱に気を付けさせるなどの工夫をしていきたい。

また、音読に関する生徒アンケートにおいて、6割の生徒は「授業でしか音読をしない」と答えていた。これは単語を書いて練習するなどの形の残る学習に比べて、音読は上達しているかどうかを実感しにくいということが理由ではないだろうか。この実態を踏まえ、授業での音読練習だけで、どの生徒にも文構造や意味が理解できるよう、段階的な指導の在り方を考えていく必要がある。

さらに、前に学習した単元を復習として音読させることで、一層、表現の定着が図られると考える。今回の検証授業では、先に紹介したように、前に学習したページの表現を用いることは、自己表現の幅を広げるためには有効である。そこで、前に学習したパートを音読する活動を取り入れることも、今後の授業で考えていきたい。その際には、英文を見ながら音読するのではなく、ピクチャーカードを見ながら英文を言わせるなど、文の意味を自分で考えるようにさせることも必要である。

<引用文献>

- 土屋澄男 2004 『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』, p. 5, 研究社
井上志帆 2009 「「わかる授業づくり」を目指して(2)」 『TEACHING ENGLISH NOW VOL. 14 SPRING 2009』, p. 17, 三省堂
文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 外国語編(平成20年9月)』, p. 8